
海と桜と風の奏者

生クリーム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海と桜と風の奏者

【Nコード】

N9068D

【作者名】

生クリーム

【あらすじ】

県立鳴海高校に入学した桜木遙は、中学校の頃からやっていた吹奏楽部に入部する。仲間や先輩たちとの関わりの中で、彼女が目指すのは――青春吹奏楽物語です。

プロローグ：最初の放課後

麗らか春の午後。

時折、春特有の強い風が吹いては、桜の花びらがひらひらと舞う。そんな中、県立鳴海高校では、この時期特有のある壮絶な戦いが繰り広げられていた。

そしてここに、その戦いの被害者が一人。

「——つまり、こうして高校に入学したからには、新しい事を始めても良いんじゃないかな。放送部は楽しいよ。それに鳴校の放送部は強い。全国常連校だからね。全国大会の帰りには、部員全員で某テーマパークにも行くんだ」

用意されたパイプ椅子に座る新入生の桜木遙に、放送部部长だという三年生の男子生徒は熱く語った。

そう、鳴海高校ではいわゆる新入部員勧誘戦争が繰り広げられているのだ。それは入学式翌日である本日から約一週間、熾烈を極める。

かく言う遙も、HRが終わって教室でグズグズしている間に、彼によって視聴覚室に連行された。ついて来る途中に会った何人かの一年生も勧誘していたが、彼らは皆うまく断っていた。なるほど、あんな感じに断れば良かったのかと思って少し感心した時には、すでに視聴覚室の中だった。

遙は熱弁する部長の顔をちらりと見て、出されてから一口も口を付けていない紙コップのオレンジジュースに目を落とす。最初に飲むタイミングを失ってから、どうも飲み辛い。

「桜木さんは声が良い。それに舞台映えもする。きっと活躍出来るよ。——おっと、ジュースを飲んでいないね。オレンジは嫌いだった？」

「いえ……。頂きます」

遥は紙コップを両手で抱え、ソロソロと飲む。少しぬるかった。

「おっと、もうこんな時間か。今日はありがとう」

その言葉に、ようやく遥は立ち上がる。そんな遥を見て、違う場所では何人かの一年生に対応していた女子生徒が見送りにきてくれた。

「今日はありがとう。あとゴメンね。彼、強引な所があるから」

「いえ、そんな事は」

「遠慮しなくても良いよ。——もし良かったらまた来てね」

「あつ、はい。でも……」

説明を聞いて、放送部に少し興味が湧いたのは事実だ。全国大会や某テーマパークにも惹かれた。彼の言う通り、新しい事に挑戦するのも悪くないかも知れない。

でも。

「私、絶対に入るって決めた部活があるので」

「そつか。じゃあまたね。その部活、頑張つて」

「ありがとうございます。……失礼しました」

遥は視聴覚室の扉を閉めた。口の中にオレンジの風味が残っている。彼女たちに少し悪いかな、と思った。

部室はどこだろう。

遥は校内を彷徨っていた。校内の至る所に貼つてあるポスターの地図では部室の場所が分かりにくい。もっと詳しく場所を聞いておけば良かったと後悔した。

音が聞こえるから、近くまでは来ているのだろう。きよろきよろと辺りを見回していると、

「あれ、遥。どこ居たんだ？」

「……お兄ちゃん」

兄である三年生の桜木順が立っていた。

放課後の校内を二人で並びながら歩く。

「何で迷ってたんだ？ お前のクラスにもウチの部員は行つただろ」

「放送部の部長に捕まってたから」

「ああ、山田か。なら仕方ない」

順はからからと笑った。

「お兄ちゃんこそ何でここにいるのよ？ 部活は？」

「ちよつと先生に報告。部長って結構忙しいんだ」

少し歩くと、一年生用の昇降口に来た。「お前靴履いてそこで待つてろ。俺もすぐに来るから」

「……部室って外にあるの？」

「ポスターにそう書いてあっただろ。——じゃあ待つてろよ」

順はすぐに見えなくなつた。遥は言われた通り、靴に履き替える。「外にあつたのか……」

てつきり校内にあるあるものとばかり思っていた。これでは見つからないのは当たり前だ。

「行くぞ。——緊張する？」

「ちよつとだけね」

音はだんだん近づいてきた。部室が近い証拠だ。一人だけで乗り込むのは心細かつたに違いないが、こういう時には兄の存在がありがたい。

部室まであと五メートルというところで、一人の少女が声を掛けてきた。

「あれ、桜木くん。どうしたの？」

「ちよつと職員室に行つて来たんだ。それより二年は帰つて来た？ 今年是一年、結構入りそうか？」

「まあまあかな。今はパートごとで見学してもらつてるとだよ」

遥は二人の顔を交互に見た。会話の内容からして、彼女は部員に違いない。おそらく三年生だろう。

「ねえ桜木くん。その子、もしかして……」

「ああ、妹の遥。コイツもクラだから、面倒見てやってくれない？」
いきなり自分の事が話題になって、遥は少々面食らつた。

「うん、分かつた」

「それじゃあよろしく」

順はそれだけ言うと、部室の中に入ってしまった。もう少し、せめて部室までは一緒にいてくれてもいいのに、と思う。高校生にもなつて兄妹で一緒にいるのは恥ずかしいのだろうか。

「よろしくね、遙ちゃん。私はクラのパーリーの田村麻美子です」

そう言つて微笑んだ彼女は優しそうな感じだから、遙は緊張を少し解いた。

「はい。よろしくお願いします、田村先輩」

これからお世話になる先輩。第一印象は大切だ。遙はハキハキと挨拶をした。田村先輩もにつこり微笑んだ。

部室はすでに目の前にあった。木造の平屋。結構古い建物だが、掃除が行き届いていて、汚いという印象はない。扉横にはコンクリートのブロックで囲まれた小さな花壇があつて、ミニトマトが植わっていた。花壇には手作りの白い看板が刺さつていて、黒いビニールテープで”園芸部”とあった。ちなみにこの学校に園芸部はない。遙は部室に――鳴海高校吹奏楽部の部室入った。

「部室内ではスリッパを履いてね。あつ、靴は貸して。ここに入れておくから」

「ありがとうございます」

田村先輩は遙の靴を、部室に入つてすぐ右の靴箱に仕舞った。遙は用意されていた来客用の茶色いスリッパを履く。

「あゝしまった。今日はもう少ししたら合奏だから、パートの見学はもう出来ないよね。ちょっと待ってて」

先輩はすぐに積み上げられていた丸イスを十個ほど並べた。

「もう少ししたら合奏だから、ここで待っててもらっても良い？」

「はい。分かりました」

「あまり相手出来なくてゴメンね」

「いえ、大丈夫です。全然構いません」

とりあえず遙は鞆を抱えてイスに座った。そのままぼんやりして

いると、楽器と譜面台を持った部員が次々と入って来る。見学をしていた一年生は、何人が帰って行ったようだ。

「あれ、もしかして桜木さん？」

その声に振り向くと、一人の女子がイスに座るところだった。

「やつぱり！ 五組の桜木さんだね。あたしは同じクラスの原因尚美。覚えてない？」

遥は記憶を辿ってみたが、そんな名前の人がクラスにいたような気がしたけど、顔の方は全然覚えていなかった。もともと人の顔と名前を覚えるのは不得意だからしょうがない。

「ごめん。ちよつと覚えてない……」

「あついいいよ。あたしは桜木さんを中学校の頃から知ってたんだし。ほら、去年の県大会。ソロ吹いていたよね。スッゴく上手だなって思ってたんだ」

そつえばそんな事もあった。手放しで賞賛されるのは照れくさい。

「そんな事ないわよ。私なんてまだまだだし。——原田さんもクラ？」

「うん。って言ってもあたしはバスクラだけだね。あゝそれから名字は何かイヤだから、名前で呼んでくれない？ ほら、クラスも同じだしね」

バスクラ——バスクラリネット。遥が吹く一般的な^ベクラリネットよりずっと大きく、一オクターブ低い音が出るクラリネットの仲間だ。遥も中学校の時に吹かせてもらった事があるが、情けない音しか出なかった。

「バスクラか……」

「そう。だから入部したらパートも同じだよ。これからよろしく！

——遥って呼んでいい？」

「いいわよ。こちらこそよろしく、尚美」

友達が出来た。しかもクラスも部活も同じ友達。

これは良いスタートだ。遥は満足して、前に向き直った。

遙の中学校から鳴海高校へ進学した同級生は、十人もいなかった。その中に遙の友達が入ってない。そして自分は、兄ほど明るい性格ではないと十分承知している。最悪、友達無しで過ごす三年間も覚悟していた。

「ほら遙。今から基礎合奏やるみたい」

尚美の声に顔を上げると、二人の女子生徒が前に出ていた。おそらくコンサートミストレスなのだろう。メトロノームとハーモニーディレクターを使って、部員たちに指示を出していく。

いつの間にか丸イスは満席になっていた。二人ほど立っている人もいる。

「ハーモニーディレクターを弾いている方は知ってる。長谷川先輩っていうホルンの先輩だよ。中学校が一緒だったんだ」

「もう一人は田村先輩。クラのパートリーダー」

「へー。同じ学校？」

「ううん。さつきちよつと話をしたから」

一定のテンポでリズムを刻むメトロノーム。

クラリネットから始まったロングトーンは、サククス、ホルンと重なり、部室に約五十人の音が響き合う。吹奏楽部の風景がそこにあった。

基礎合奏は二十分ほどで終わった。やがて顧問で指揮者の野村先生がやって来て、指揮台に上がる。四十代前半の、少しお腹が出た先生だ。黒いウィンドブレーカーを着たその姿は、ただのおじさんに見える。

「起立、礼」

「お願いします」

部長である兄が号令を掛け、部員たちは礼をして座る。

「基礎合奏はもういいか。じゃあ課題曲やるから出して」

部員たちは譜面台に置いたファイルから楽譜を探す。それが一段落して、野村先生は指揮棒を振り始めた。

最初は一部の木管楽器とシロフォンによる前奏。遙はこの曲に聞き覚えがあった。今年度の全日本吹奏楽コンクールの課題曲1だ。今年の鳴海高校は、夏のコンクールでこの曲を演奏すると順は言っていた。遙も幾度となくCDを聞いた。華麗で壮大な曲だ。

少しずつ楽器が増えてゆき、曲は徐々に盛り上がる。そして金管楽器も入って、前奏は終わった。

先生が順に合図を送る。ここからはファーストトランペットのソロなのだ。

順は危なげなくソロを吹き終えた。たった八小節だけだったけど遙は、やはり兄は上手いと思った。やがてメロディーはクラリネット、ホルンと移行し、曲は中間部に差し掛かる。

「さつきペットのソロを吹いたカッコいい人って部長さんだよね。やっぱり上手いな」

「うん、まあそうね」

「遙、知ってる人？」

「……ウチの兄」

「マジで!？」

中間部のゆったりとした旋律も終わり、曲は主題に戻った。クライマックスに向け、どんどん盛り上がる。そして曲は終わった。

圧倒的な迫力。やはり高校の吹奏楽は、中学校とは全然違う。気づいたら拍手をしていた。周りの人たちも拍手を送っている。一曲丸ごと通したのは、デモンストレーションも兼ねていたのかも知れない。

遙は無性にクラリネットを吹きたくなった。あの中で一緒に演奏したいと思った。部活を引退してからこっち、眠っていたクラリネット奏者としての血は、今の演奏で完全に目覚めた。

「スゴいね……」

「うん……」

「早く入部したいなあ……」

「うん……」

思うのはみな同じようだ。遥と尚美は、この日の練習を最後まで見届けた。

「おい、待てて遥！」

自宅マンション最寄り駅。帰宅ラッシュでそれなりに人口密度が高い構内で、遥は自分と呼ぶ声に立ち止まった。すぐに兄が追い付く。

「一緒に帰るか？」

「うん」

まだ日は完全に暮れていなかった。遠い空は、うつすらと青み懸かっている。

「プラスどうだった？」

「スゴかった。やっぱり中学校とじゃ全然違うのね」

「あつたり前だよ」

こうやって二人で帰るのも久しぶりだ。遥は順と違う中学校だったから、実に小学校以来となる。

「それで？ プラスに入るって決めたのか？」

「うん。元からそのつもりだったし」

「じゃあ初めてだな。お前と一緒に部活になるのは」

「そうね」

話していると、すぐにマンションに着いた。エレベーターで五階まで上がる。

「これからはお前も家にいるんだから、夕飯は交代で作るぞ。でも今日は俺が作ってやるよ」

「わかった」

玄関前で制服のポケットから鍵を取り出した順だったが、しかし扉は開いていた。

「お帰り。順、遥」

「あれ、母さん今日は早かったの？」

順の問いに、母親は笑いながら答えた。

「そうなのよ。夕飯は作ってあるから、あんたたち着替えて来なさい」

「へーい」

「わかった」

遙は自室に入った。制服をハンガーに掛ける。中学校のセーラー服とは違う紺のブレザー。それを眺めているうちに、自分が高校生になったという事を強く実感した。

明日の放課後からは仮入部が始まる。遙は、早くクラリネットを吹きたいと思った。

第1話：部活動紹介

水曜日。つまり入学式から二日後の昼休み。

私、桜木遥は一年五組の教室で、昨日の放課後から仲良くなった原田尚美と、彼女と同じ中学校出身だという森川マキの三人で机を囲み、弁当箱を広げていた。周囲でも同じように机を囲んでいる集団がちらほらと。もしかしたら違うクラスの人間も混じっているのかも知れない。

「それにしても、やっぱり高校って勉強勉強だね。春休みの課題、大変だったよ」

森川マキ。彼女は中学校では、テニス部だったらしい。私や尚美よりも長身で手足が長く、いかにもスポーツが得意そうな印象だ。

「春休みなんだから、宿題出すなよって感じだよ。前日は大変だった」

尚美が私の方を向いて同意を求めた。

「そう？ あんなの毎日やっていれば、すぐに終わるわよ」

実際、わたしは高校側から課題として出された五冊のワークは、一週間で終わらせている。

「えゝ遥って実は優等生？」

「私なんか英語とか、所々やってない箇所あるのに」

「マキ、それはダメだって」

こんな他愛のない話で、席は盛り上がった。

「そう言えばさ」

昼食も食べ終わり、弁当箱を片付け始めた時。不意に尚美が口を開いた。

「――五・六時限は部活動紹介だよ。どこへ行けばいいんだっけ？」

私は片付ける作業を一切中断し、教室の窓から見えるトタン屋根

の建物を指差した。

「体育館。掃除が終わったら、あそこに集合よ」

「あ、そうだったそうだった。じゃあ掃除が終わったら一旦教室に集まって、それから行こうよ」

「分かった」

丁度その時、昼休みの終了を告げるチャイムが鳴った。次いでスピーカーからは放送と、流行の音楽が流れ出す。清掃の時間だ。

音楽室担当の尚美とマキとは違い、私の分担は教室だから、そのまま残って机を下げ始める。すると、目の前にスツと箒が差し出された。

「ねえ、桜木……遥ちゃん。机は男子に任せて、一緒に箒をしない？」

視線で辿ると、そこには三人の女子の姿が。名前はええと——まだ覚えていない。しかし私は、その箒を受け取った。

「ありがとう」

「じゃあ遥ちゃんとマスミはあっちから掃いてね」

「おっけー」

よし、マスミという名前か、と私は目の前の少女を見る。私よりも背が低く、おっとりとした感じだ。

「掃除が終わったら、体育館だよ」

「そうよ。——ええと、マスミって呼んでいい？」

「いいよ」

「マスミは入りたい部活とかある？」

見た所、運動部系ではないだろう。これで実は柔道部です、だとか水泳部です、などは無いはずだ。多分。

「うーん、中学校の時もやっていたし、合唱部かなあ。遥ちゃんは？」

「私は吹奏楽部」

なる程、合唱部か。似合っている。吹奏楽部と合唱部は同じ音楽系部活動同士、何かと協力し合う事がある。これからお世話になる

事も多いだろう。

「よろしくね」

「うん、こちらこそ」

「遥あ、体育館行こー」

「いいわよ」

十分間の清掃を終え、尚美とマキが帰って来た。教室掃除も終わり、各々移動を開始し始めている。

「体育館つてどこだっけ？ まだよく覚えていないんだよね」

「付いて行けばいいんじゃない？」

廊下は既に、一年生で一杯だった。この流れに沿って行けば、体育館に辿り着けるに違いない。

三組、二組、一組、いくつかの特別教室を前を通り過ぎ、渡り廊下を渡ってようやく体育館に辿り着いた。そして一組から出席順で一列に並ぶ。全部で八クラスあるから、五組はだいたい真ん中あたりだ。

会が始まるまでまだもう少し時間に余裕があるので、体育館の中はザワザワしていた。

やがて時間が来た。生徒会長だという男子生徒の挨拶が終わって、いよいよトップバッターのサッカー部の紹介が始まった。

鳴海高校は、部活動が盛んな学校だ。運動部が十八、文化部が十五ある。今日は各部持ち時間は三分で自分たちの部活動を紹介するのだ。

各部の代表数人、もしくは全員が体育館外で待機し、自分たちの番になるとステージ脇の出入り口から入って階段を上り、ステージに上がる。そこで紹介を終えると今度は反対側の階段を下り、ステージ脇の出入り口から出て行く。会はそんな流れだった。

各部の紹介は、バラエティに富んでいた。まずは運動部からだっただけ、全ての部活が正式なユニフォームを身に付けていた。水泳部などは（もちろん男子部員が）水着とキャップとゴーグル着用で

ステージに上がり、女子たちの“きゃー！”という声援を浴びていた。（私は叫んでいない。断じて）

内容も、手堅く練習内容や大会の予定を紹介する部もあれば、部活とは一切関係ないギャグで笑いを取ったりする所もある。

圧巻だったのは柔道部と剣道部と弓道部だ。

柔道着・剣道着・弓道着を着て、防具を着けた姿はそれだけで絵になる。

柔道部は畳を持ち込んで技を実演し、剣道部は実際に試合をしていた。弓道部は俵を設置して、みんなの目の前で矢を放った。矢は思ったより速いスピードで飛び、大きな音を立てて俵に突き刺さる。弓道部がある中学校はそんなにあるわけではない。私を含め多くの人が、初めて見た弓道に度肝を抜かれてしまった。

運動部の紹介が終わると、五分間の休憩を挟んで、いよいよ文化部の紹介へと移った。吹奏楽部の順番は二番目。合唱部の次という事になる。

見事なカルテットを披露した合唱部の男子四人に惜しめない拍手を送りつつ、司会が吹奏楽部の名前を告げると、私はなぜか緊張してきた。

ステージに立ったのは三人。トランペットを持った兄と同じくトランペットを持った女子、進行役らしき男子だ。

「ねえ、あの先輩カッコよくない？」

「わっ本当だ」

周囲がいきなり騒がしくなった。女子だけではない。男子も。

「あの先輩、マジ可愛いんだけど」

「オレ、ああいうのタイプだ」

なる程、吹奏楽部はそういう路線で来たか。

うちの兄は、あんなのどこが良いのかは分からないけど確かにモテる。女子受けする顔なのだ。宣伝には適役かも知れない。もう一人のトランペットを持った女子も、綺麗な先輩だ。これはつまり、吹奏楽部は男子も女子も狙っているという事。

「こんにちは。僕たちは吹奏楽部です」

まだ少しざわついていたけど、進行役の先輩が話し始めた。

「今僕たちは、六月にある定期演奏会、そして八月のコンクールに向けて、毎日練習しています。皆さんも一緒に吹いてみませんか？経験者・初心者どちらも待っています。ぜひ入部して下さい」

ここで、兄と女子の先輩が、一歩前に出た。

「ではこれから、部長の桜木と、二年の広瀬が演奏します。お聞き下さい」

二人は目で合図を送ると、トランペットを吹き始めた。

ざわめきは一気に収束し、体育館の空気をトランペットの旋律が支配する。誰もが一度は聞いた事がある有名なメロディ——天空の城ラピュタの“君をのせて”——あのフレーズだ。

曲を吹き終えると、二人は深々と礼をした。盛大な拍手が鳴り響く。

「それでは皆さん、入部をお待ちしています」

最後に兄は進行役の先輩からマイクを受け取って締め括った。三人が階段を下りながらも拍手は続く。もしかしたら中には、今の紹介で入部を決めた人もいるかも知れない。少し複雑な気分だった。

「うーん、やっぱり桜木先輩、格好いいわ」

教室への帰り道。尚美がしみじみと口を開く。

「そう？ 普通だと思うけど」

「何言ってるの！ そんなワケ無いってば。——そう言えばマキ、知ってる？ 吹奏楽部の時にペットを吹いた先輩、実は遥のお兄さんなんだよ」

「えー、マジ！？ そう言われたら確かにちょっと似てるね」

「……あまり嬉しくない」

何はともあれ部活動紹介も終わって、いよいよ放課後からは仮入部だ。私は顔には出さなかったけど、わくわくしながら教室に入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9068d/>

海と桜と風の奏者

2010年10月22日00時55分発行